



Rorschach, H.  
の『精神診断学』における同時性の概念について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川原, 稔久 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005308">https://doi.org/10.24729/00005308</a>

# Rorschach, H.の『精神診断学』における同時性の概念について

川原 稔 久

## 1. 目的と問題

筆者（川原 2015）は、Rorschach, H.が学位論文（1965/1912d）で扱った一つの知覚を契機にもう一つの別の知覚が生じるという反射幻覚現象を紹介し、Rorschach, H.（1912a）にはそれら二つの知覚に共通する動きを統合して表象に結びつけるという考え方があることを示した。また、Rorschach, H.の初期の諸論文（1986/1921e, 1986/1912f, 1965/1921b, 1965/1921c, 1965/1913a, 1965/1913b, 1965/1914, 1986/1917）から象徴についての考え方を紹介し、Rorschach, H.においては深層心理学的な考え方と方法によって象徴を捉えることが前景化してきたことを示した（川原 2016）。さらに、そうした初期の論考で検討された症例のうち三症例（Rorschach 1956/1913a, 1965/1913b, 1965/1914）のロールシャッハ法プロトコル・データを紹介して、それらのデータでは知覚が移ろいやすく、情動を安定化させる内的資質の反映としての運動反応に比べて不安定な情動性を反映する色彩反応が優位であるという特徴が共通しており、いずれの症例も宗教的救済観念を發展させたという特徴があったことを示した（川原 2017）。

そこで本論文では、このようなRorschach, H.の初期の諸論文に見られる考え方を背景に踏まえて、彼が考案した知覚解釈実験（ロールシャッハ法）についての主著『精神診断学』（1948/1921a, 1998/1972）に見られるRorschach, H.の考え方を検討する。その具体的な問題を提示するために、Rorschach, H.の基本的な考え方やその背景にある経験を、ここでは三点挙げる。一つ目は、①Rorschach, H.が採り上げる臨床経験は幻覚妄想状態であることが多く、とりわけ超越的で宗教的な救済観念を發展させている症例であること、二つ目は②Rorschach, H.には複数の感覚や知覚が結びつくことで表象や意味が生じるという考え方があること、三つ目は③その結びつけ作業の場所がRorschach, H.においては深層心理学的な方法による経験によって意識されない心の動きである内面として想定されていることである。

①Rorschach, H.（1965/1912d, 1912a）が採り挙げる症例のほとんどは幻覚妄想状態であり、超越者に救済を希求する宗教観念を發展させている。そうした臨床経験が知覚解釈実験に何か影響を及ぼしているのでは

ろうか。とくにRorschach, H.が初期の諸論文で報告した症例では、それら症例を対象にRorschach, H.自身が知覚解釈実験を実施していないと思われるが、そのなかで、補遺として後に得られたロールシャッハ法のプロトコル・データがある三症例（川原 2017）があり、ロールシャッハ法プロトコル・データの特徴では運動感覚が希薄（二つの症例では皆無）であることと、刺激に知覚された概念が次々と移り変わり変容しつつあるイメージが知覚されていることが共通していた。つまり何か対象が知覚されたときにその像が変容すること（川原 2017：5-6）があり、症例は「いろいろと見える」（川原 2017：7-8）と言うように、知覚が変化する様子が反応として口述されていた。ここでは、知覚を内省し吟味するという主体の作業は希薄化していて、知覚がそのまま反応されていることが特徴ではないだろうか。つまり、知覚と反応の同時性が見られると思われる。知覚体験に圧倒されて解釈という営為に至っていないということと内面性の反映である運動感覚が希薄であることが、主体性の後退という観点で関係する可能性が筆者には着想される。また内省する主体性の後退は、刺激を内省して吟味すること無く世界や対象という外界に主体を見て、超越者への救済希求という宗教観念を生み出す可能性も着想される。

②脳解剖実習後に夢で自らの脳が削られる体感を経験し、無意識過程が視覚印象を作り出す幻覚としての夢というFreud, S.の考え方を取り入れて、反射幻覚現象に注目していたRorschach, H.（1965/1912a）には、以下に示すように、一つの知覚が契機となってもう一つの別の知覚が生じることが、二つの知覚に共通する類似性を契機に、表象を作り出し、ひいては象徴を作り出すという考え方がある。

「ある運動契機があって、それは視覚的構成要素と運動感覚的構成要素とを表象に結びつけるので、それゆえ私は“動きを統合する”という名前を選んだ。」（Rorschach 1912a：121, 川原 2015：3-4）

「視覚的印象は反射幻覚を解放し、反射幻覚は象徴として用いられるように適合される。」（Rorschach 1912a：121, 川原 2015：4）

「視覚印象は言わば二つの心的な力、つまり知的な素質と幻覚的な素質、覚醒意識と夢意識、正常思

考と分裂病思考から同時に同化される」(Rorschach 1912: 122, 川原 2015: 4)  
「運動感覚は、当該の視覚像によって引き起され、象徴の原因を形成する。」(Rorschach 1912a: 124)

これらを承けて筆者はRorschach, H.の考え方を、「感覚的な印象に、情動や感情、思考が加味され、感覚が弱められたり反射幻覚が解放されたりして、意味が作り出されることで、象徴が現れると考えている」、「動きにしても見た目にしても、似ていることが複数の心理機能を結びつけ、統合的な意味を生成するとするならば、そこに象徴機能が出現すると考えられる」(川原 2015: 4)とまとめ、さらに筆者(川原 2015: 5)は「反射幻覚現象を手がかりに、似ていることで複数の感覚や心的機能が呼び起こされ、それが象徴を形成する」とまとめた。ここで、Rorschach, H.が「反射」と言い「同時」と言うように、複数の知覚が同時に生じることの同時性が知覚解釈実験の解釈に関する考え方に反映されている可能性を筆者は考える。

③表象が形成される場所は目の前に対象がある場ではなく、目の前に対象がなく対象不在のなかで思い浮かべる(表象する)場であり、なんらかの内面が想定される。その点に関して、Rorschach, H.の初期の諸論文八編からは筆者(2016)が検討したように深層心理学的な思考が前景化していた。各症例を提示する目的は無意識的な過程が介在していることを示すことにあり、症例に対する介入には言語連想法、自由連想法、催眠が取り入れられ実施されていたし、各症例の表現に関する解釈には転移と逆転移を踏まえた、性的衝動を中心とした対象への無意識的な欲動の観点があり、欲動の昇華(Rorschach 1986/1912e: 69-74)、オーラル・サディズム(Rorschach 1986/1912b: 158-161)、両親への同一化欲動(Rorschach 1986/1914: 90-97)や近親姦欲動(Rorschach 1986/1913a: 82-85, 1986/1913b: 86-89)が取り扱われていた。

しかしながら『精神診断学』(Rorschach, H. 1998/1972)の知覚解釈実験(ロールシャッフ法)では「知覚と統覚の働き」(Rorschach 1998: 20)の形式的な探求が第一義とされ、表象の内容を深層心理学的に分析する内容分析はほとんどないと言っても過言ではないと思われる。後に詳しく検討するように、探求される内面は「感覚集合体」ないしは「感覚複合体」(Rorschach 1998: 17)とそれを感覚記憶心像と照合して同化する統覚という心理機能になると思われる。ここにも複数の感覚や知覚の同時性の問題が反映されているのではないかと筆者は想定する。

そこで、以上、①～③で検討したように、本論文の問題をRorschach, H.の知覚解釈実験における知覚の同時性に定めて、Rorschach, H.の考え方に見られる知覚と解釈の違いについてと知覚の同時性について検討を加えたい。一口に同時性といってもその中味はこれまで検討してきたようにいくつかの要素があると思われることから、それらを①知覚と反応の即時性、②反応産出過程における複数の感覚の同時存在性、③内面性の後退による主体の外在化として検討したい。

## 2. Rorschach, H.の知覚解釈実験の反応産出過程における同時性

現在はロールシャッフ法と呼称される知覚解釈実験は『精神診断学』の副題に「無作為の形を解釈させること」とあるように、無作為の形を見せて「これは何に思われますか？」(Rorschach 1998: 16)と判断させるものである。Rorschach, H.はここで要求する解釈が「知覚と統覚の概念に属する」(1998: 17)として、各概念をBreuer, E.の教科書(『精神医学教本』1916: 9)から以下のように引用して定義している。

「知覚が生じるのは、感覚ないし感覚集合体がわれわれの内部に、以前の感覚集合体の記憶心像を呼び覚ますこと、つまり、以前の経験において共に生じたためにとくに強固な関連と他の感覚集合体からの独立性を獲得した要素からなる感覚記憶の複合体がわれわれのうちに浮かぶことによってである。このように知覚には、感覚、記憶および連合という、より狭い概念をも包含する。」(Rorschach 1998: 17)

そしてRorschach, H.は続けて知覚解釈という反応産出過程を次のように描く。

「したがって、知覚を、現存するエングラム(記憶心像)を新しい感覚複合体に連合的に同化させることであると言い表すこともできるなら、無作為の形の解釈は、感覚複合体とエングラムとの間の同化の仕事が、心のなかでまさに同化の仕事として知覚されるほど大きい知覚であると言い表すことができる。このように感覚複合体とエングラムの間の不十分な相似性を心のなかで知覚することが、知覚に解釈という性格を付与するのである。」(1998: 17-18)

したがって、知覚には①諸感覚の集合と②諸感覚の

集合である記憶心像と③それらに関連づけたりそれらから独立性を獲得したりする連合や同化という仕事が含まれており、知覚と解釈は別で、解釈は感覚集合体とエングラムとの間の同化作業を心のなかで同化の仕事として知覚される「大きな知覚」として位置付けられる。しかも感覚集合体とエングラムとの同化・連合作業のなかで、「関連」付けと「独立性」の獲得を行い、一致と不一致とを認めるという「不十分な相似性」を知覚することが解釈という性格を与える。

それゆえに無作為の形が何に見えるかと問われた際の反応のうち、「すべての反応がこの意味での解釈というわけではない」(1998:18)として、Rorschach, H. はすぐさま同化の仕事を知覚し得ず解釈という意識が無い決めつけ反応の例を挙げ比較検討した上で、「知覚と解釈の違いは個人的かつ連続的な性質のものであり、一般的かつ原理的な性質のものではない、それゆえ解釈は知覚の特別な場合でありうる」(1998:19)とまとめている。

したがって反応産出過程においてすでに複数の感覚が同時に存在し、しかも知覚が即時にそのまま反応として産出される場合が健常者の場合にもあって、それは刺激に対する内面での作業と間接化の質の問題であろうと推測される。ここでは反応産出過程においてすでに、複数の感覚の同時存在性と知覚と解釈の即時性が指摘できることをまずは確認しておきたい。

### 3. 「実験の諸因子」における同時性

Rorschach, H. は知覚解釈実験の形式諸因子として、反応数・反応時間・失敗頻度・決定因・領域把握・反応内容を挙げ (Rorschach 1998:20)、健常者からさまざまな病態の者という広い範囲の多数の実験結果データをもとに形式諸因子の検討を行っているが、そのなかでも「知覚過程における形態要因、運動感覚的要因および色彩要因の働き」(Rorschach 1998:24)と「絵柄の把握の様式」(Rorschach 1998:38)に関して同時性の問題が反映されている。つまり決定因と領域把握に関して同時性の問題を取り上げ、Rorschach, H. が主張する「一次性」における同時性としてまとめた。

#### (1) 決定因における同時性

形態反応 (F)・運動反応 (B)・色彩反応 (Fb) という三種の決定因のうち、とくに①運動反応と②色彩反応における同時性を取り挙げる。

①運動反応は「形態知覚プラス運動感覚の流入によって決定される反応である。被験者は解釈された対象が動いていると表象する。」(Rorschach 1998:26)とする Rorschach, H. はすぐに反応に運動感覚が作用し

ているかどうかの見分けが難しいことを指摘する。「言及された運動は反応の決定に一次的に関与しているか。実際に運動を感じ取っているのであって、単に形が把握され、それが二次的に動いていると解釈されているのではないかどうか。」(Rorschach 1998:27)として、絵柄の形や配置から連合的に喚起されて運動に言及される場合は形からの意味付けであって、「追感された運動が問題になっているわけではない」(Rorschach 1998:26)とする。そして「大部分のB反応においては、同化の過程ですでに形態エングラムと運動感覚的エングラムとが稲妻の如き速さでまじり合うという印象、つまり、見られた対象の形と運動は同時に把握される(一次的B)という印象が強いのに対し、別な場合には、まず絵柄の形が、つづいてその運動が知覚されるように見える(二次的B)」(Rorschach 1998:29-30)として、「運動感覚の流入」が形態知覚と同時的であることが本質であるとしている。その際の例として図版Ⅲの人間運動反応が脚と胴体が離れていても「この分離箇所を捨象してしまいうことのできるためには一次的な運動感覚的要因が必要であることはほぼ確実である。」(Rorschach 1998:27)とする。一致と不一致を認める「不十分な相似性」を知覚する同化の仕事としての解釈においてもその基礎には形態知覚と運動感覚の同時存在性が前提になっていると言えよう。

②色彩反応は「色彩が反応の決定」(1998:31)に影響を及ぼすことが確かめられる反応である。辻(1997:77-78)は、Shapiro, D., Schachtel, E.Gらの色彩知覚に関する先行研究を総括して、形態知覚よりも色彩知覚がより受動的で直接的で即座的であることから色彩知覚の特徴を「受動性」「直接性」「即座性」として、形態知覚が色彩知覚に対して間接化を果たしていると位置付けている。このことから感覚の同時性ではなくて色彩刺激がより直接的で即座的であるという意味での同時性が指摘できる。Rorschach, H. (1998:31)は1つの反応における形態知覚と色彩知覚のどちらがより「本質的」かによる関係から、形態色彩反応(情緒の関係能力)・色彩形態反応(情動性)・一次的色彩反応(衝動性)の三種に区分するが、形態性がほとんど顧慮されず「ただ色だけによって決定されている」色彩反応を「一次的色彩反応」としており、この一次性において直接性としての同時性と即座性としての同時性が極まっていると言えよう。ただし反応産出過程からより厳密に考えると、この直接性と即座性は刺激特徴という面と感覚感受の側面と反応選択決定という局面のいずれのことなのか。むしろいずれでもあって

いずれの局面とも言える程の直接性であり即時性であるとすれば、この時の同時性とは弁別や識別が不能な一体性としての同時性ということができるとも考えられない。

また形態性への顧慮が伴う色彩反応については、複数の知覚の同時存在性が指摘できると思われる。その点に関してRorschach, H.は「まず第一に形を、次に色彩をも考慮に入れる形態色彩反応においては、必然的に、心的機能の異なった領域—形の解釈においてはとくに連合的要因、色彩を考慮するときには情動的要因—が合一せねばならない。それゆえ形態色彩反応は連合的でも情動的でもある順応、外的刺激に対する同化である。」(Rorschach 1998 : 34-35)と総括する。これに関連して辻(1997 : 91)は「複合性」および「超越可能性」という考え方を提示している。これは運動反応における運動感覚の流入にも当てはまることであるが、「色彩体験と形体体験という全く性質の違った体験が、Rorschachが記述したように単一の反応に融合するという事は、ひとつの意味ある体験が性質の異なる2つのものの同時的な参加によって、はじめて可能になることを読みとる力、言い換えると複合力によって成立している。」として、「色彩の認知を無視しない、その分それにしばられながら、全面的に縛られるのではないという余地が生じた時、その自由性で他の要因を同時に受け止め活動させ得る可能性が生じる。(中略)無視することはない、しかしそれに全面的にしばられるのではないことを、超越性transcendenceあるいは超越可能性transcendencabilityと概念付けておこうと思う。」と述べている。そしてこの「ひとつのことを捉えるのに2つの性質の異なるものを複合せせる問題」は、全体反応における「同時性の問題に直結している」と述べる。そこで領域把握における同時性について示そう。

## (2) 領域把握における同時性

Rorschach, H.は形式諸因子のなかで、「絵柄が全体として把握されているか」「それとも部分的にか」という領域の把握の様式を取り挙げる(Rorschach 1998 : 38-40)。その全体反応のなかで絵柄全体を、①「提示されたものの個々の部分をできるだけ多く考慮に入れてできるだけ少なく捨象することによって、図像を一次的に全体像として見ている」一次的全体反応と、②いくつかの部分的な解釈をより早い連合過程で関係づける「同時的—結合的な全体反応」(これも一次性全体反応とされる)、③いくつかの部分解釈とそのあとこれらの解釈を関係づける「漸次的—結合的な二次的全体反応」、④「提示されたものの一部を多少とも

明確に把握し、この部分解釈にもとづいてあるものの全体像に言い及び、提示されたものの他の部分はごくわずかししか考慮に入れていない」作話的全体反応を区別する。

これらの区分は、空間的な一挙性と部分結合性という対比と、時間的な同時性と漸次性という対比の組み合わせである。空間的な一挙性と時間的な同時性は絵柄全体が初めから関与しているゆえに一次性とされ、空間的な部分結合性と時間的な漸次性は「部分から全体が導かれる」ので二次性とされているのである。

## (3) Rorschach, H.の「一次性」における同時性

これまで決定因としての運動反応と色彩反応、そして領域把握における全体反応に見られる同時性を確認してきたが、そのいずれにおいても「一次性」というRorschach, H.の表現が見られた。運動反応における「一次性」は形態知覚と運動感覚の流入の時間的な同時性のことであった。色彩反応における「一次性」とは「一次的色彩反応」という色彩知覚の直接性と即座性という意味での同時性であった。領域把握における「一次性」とは「一次的全体反応」という空間的な一挙性と時間的な同時性という意味での同時性であった。このように「一次性」は異なる意味で用いられている。反応産出の過程には、Breuer, E.が知覚の要素と定義した三種、感覚(受動的な感受)・記憶(蓄積)・連合(比較検討による間接化)の過程に加えて、反応(能動的な選択決定)の過程があり(辻 1997 : 79)、四種の過程があるとすれば、そのそれぞれに同時性の現象が指摘できるのかもしれない。

とりわけ領域把握に関する同時性には、これまで論じてきた知覚と解釈の即時性や複数の感覚の同時並存性、色彩刺激に対する色彩知覚の直接性・即座性という意味での同時性、複数の要因を許容する複合力や超越性・自由性に加えて、それらとは異なる次元の同時性も存在することを指摘したい。つまり、一致と不一致を認め不十分な相似性を知覚するという解釈の際に、全体反応として出来るだけ多くを用いて少なく捨象することを可能にするエングラムの豊かさや不一致や違いに許容的な柔軟性(辻 1997 : 22)である。感覚の複数性とは違うエングラムにある感覚記憶の集合体・複合体における概念の豊かさが、領域把握の一挙性や同時性を可能にするのではなからうか。Rorschach, H.はその点に関して一次性全体反応が可能のためにはエングラムの豊かさ(Rorschach 1998 : 59)が必要であることを指摘している。この点はRorschach, H.が知覚解釈実験の結果を知能と情動要因から議論考察している箇所であり取り挙げられている。

#### 4. 内面性の後退と主体の外在化における同時性

Rorschach, H. は知覚解釈実験の結果を知能の構成要素とそれへの情動要因の影響という観点からまとめたうえで、体験型という概念の議論考察に主力を注いでいる。そのなかで、内面性の後退と主体の外在化において主体が世界や対象と一致したり一体化したりするという同時性を最後に取り挙げたい。

##### (1) Rorschach, H. による知覚解釈実験の結果の検討の構造

Rorschach, H. は知覚解釈実験の結果を、健常者の知覚と統覚の特徴とさまざまな病態の者の特徴とを比較検討する方法によって、①まず知能の構成要素を抽出している。つぎにそれら知能の構成要素、知能の諸因子を、意図的に影響を及ぼしうるものとそうでないものとに分類する。つまり②知能を構成する諸因子を習得可能な要素と天賦の要素とに分ける。そのうえで③知能要素への気分変調の影響を検討する。その際に躁病と躁的気分変調との違いが運動衝迫と内的な運動感覚の有無によるとして④「体験型」概念の提示と議論が展開される。

##### ① 知能の構成要素

「聡明な健常者」120名の特徴を Rorschach, H. は以下としてその心理機能をあてはめる (Rorschach 1989: 57-67)。

「良い見方をされた形のパーセントが高い」：知覚と記憶心像の明確さ、連合と同化の過程を統制する注意の持続と集中の機能が想定されている。

「知覚過程への運動感覚の流入の数が多し」：全体反応・独創反応との比例関係から多様な想像力、無意識的情動的なエネルギーや連合活動の素質的なエネルギーを想定している。

「全体反応が多い」：記憶心像の豊かさと現存性の高さ、全体を志向する意志を反映し、連合活動の素質的なエネルギーと複雑な作業への達成意志の指標としている。

「豊かな把握型」：抽象力を反映する全体反応と実際の具体的な選択傾向を反映する部分反応とのバランスという観点から、連合のエネルギーである情動要因と連合の明確さである連合要因を配分する能力で、論理関係と論理順序を正しく処理できる力の指標とする。

「把握様式の適度に引き締まった（「きちんとした」）継起」：注意と緊張が安定して形態視と連合過程が正確である、論理機能の秩序づけ能力の指標。自動化され無意識裡に習性的に働くとする。

「動物パーセントが低い：反応が多様である」：反応が多様であることから、連合のゆるさ、紋切型化から移動可能なゆるさの指標。

「独創性のパーセントは、高すぎも低すぎもしない」：独自の記憶心像（エングラム）を適度に持っている指標。

これらの特徴をまとめた知能の構成要素が以下である (Rorschach 1998: 67-68)。

1. 持続する能動的な注意力 (F+ および継起)
2. 知覚の明確さ、エングラムの明確さ、同化作業における連合過程の明確さが適度であること
3. できるだけ自動化された、ひとりだけで始動する、論理機能の秩序づけ能力 (継起)
4. 連合活動のある種の素質的エネルギー、複雑な作業への意識的ないし無意識的な意志 (G)
5. 注意力を緊張させ続ける目標表象を介しての、情緒的要因と連合的要因とを配分する能力 (把握型)
6. 紋切型化の連合態勢を形成する能力が適度であること
7. 連合のゆるさ、ふつうだと強力になってしまう紋切型化の連合態勢から連合を引きはがす力が適度であること (動物パーセント)
8. 固有エングラムの数が適度に多いこと、独創性、すなわち独創的な連合を形成する能力が、周囲の人びととの連合世界への順応能力が失われないう意味で適度であること (独創反応パーセント)
9. 連合の豊かさ (多様性、独創反応)
10. とくに連合の現存性 (G)
11. 内的創造の能力 (B)

##### ② 知能要素の分類

上記の知能を構成する要素について Rorschach, H. は、意図的に高めるように努力を促したり意図的に低めるように努力を促したりした場合に、それらの要素が意図によって影響する可能性を検討し、意図によって機能が上昇する群 I (習得可能な機能) と上昇しない群 II (天賦の機能が素質があれば上昇しうる群) を抽出している (1998: 79)。

##### I. 機能の上昇

持続的で能動的な注意の能力 (F+, 継起)

知覚および同化作業の際の連合過程の明確さ

(F+)

論理機能の、配分し秩序づける能力（継起、把握型）

紋切型化の連合態勢を形成する能力（T%）

## II. 機能の上昇はない

連合のエネルギー（G）

紋切型化の連合態勢から連合を引きはがす能力（T%）

独創的な連合を形成する能力（Orig）

内面的創造の能力（B）

このように見てくると、Rorschach, H.の分類および分析の作業は、知的な機能を認知的な機能とそれを支える素質的なエネルギーないし能力に区分する結果となり、知能の構成諸要因に対して認知要因と素質要因という構造化を図るとともに、おのずと知的機能に対する情意機能という対比を浮き彫りにする構造化となっている。実際、Rorschach, H.はIの機能上昇に伴いIIの素質機能はエネルギーを奪われるかのように低下することと、情動性はこの二種の機能分類には含まれないこと、認知機能であるIの機能上昇において情動性は安定していることを指摘しており、形態視が間接化機能を担う側面を反映していると思われる。同時性に関してみると、これまで検討した運動反応（B）と全体反応（G）がIIの素質的な要因に関連しており、複数の感覚の同時並存性や空間的な一挙性、時間的な同時性は、すでに指摘したエングラムの豊かさや現存性といった要因とともに、より素質的な要因に関連して生じる同時性であるという位置付けが可能性かもしれない。他方、同時性に関係していた色彩反応はおそらく認知要因に対比して情動性に関連して位置付けられることが予想される。

また、反応産出過程の感覚感受・記憶心像エングラムの蓄積・比較検討による連合同化の過程・選択決定による反応という過程では、各過程における明確さとそれに伴う注意力の機能が良質の形態視F+を中心に関連するであろうし、比較検討による連合過程や選択決定の反応過程には、論理機能の秩序付けおよび情緒と連合の配分能力とが継起型を中心に関連するのではないだろうか。その時どのような同時性が関わりうるのかを考えると、知覚と解釈の即時性では産出過程の途中の間接化のプロセスが無い場合に相当するかもしれない。複数の感覚の同時並存性では感覚感受の過程での感受性の幅のようなものと関係するかもしれない。また、領域把握の全体反応での空間的な一挙性には記憶心像エングラムの蓄積における豊かさや比較検

討における連合同化の過程における明確さが関連するであろう。

### ③ 知的要素への気分変調の影響

続いてRorschach, H. (1998 : 73-75) は、抑うつ気分変調者とうつ病の場合の知能要素の傾向と躁の気分変調者と躁病の場合の知能要素の変化とを比較検討している。具体的には、うつ病とうつの気分変調の場合是一致的で、形態視を良くし継起を引き締めるが、全体反応を少なくし把握型を貧しくし、運動反応および色彩反応、多様性、独創反応を減らし、動物反応を増やす。

しかし、躁病と躁の気分変調は必ずしも全ての傾向は一致せず、躁病では躁の気分変調と異なり、全体反応、独創反応、把握型、多様性は減退し、紋切型化が進み（動物%が上昇）、形態質の悪い運動反応と色彩反応が増える。先ほどの知的機能の分類で言えば素質的要因が低下しているし、運動反応の形態視の質が低下している。「躁病は単に躁の気分変調の高まりではなく」（1998 : 73）く、つまり躁の気分変調の程度が高じて躁病の状態が出来するのではなく、両者には本質的な違いがあって、それは連合活動のエネルギーが躁病では抑えられ躁の気分変調では伸びていて、連合のゆるさも躁病では妨げられ躁の気分変調では伸びている点にあることを踏まえている。そして、その原因は不明だとしつつも両者の臨床的な違いは「運動衝迫」の違いだとする（Rorschach 1998 : 74）。実際の運動性、現実のactivityがあると連合活動は伸びず、運動衝迫、実際に行われる運動性というactivityが欠如すると内面での創造や連合活動のエネルギーは伸びて連合のゆるさも伸びるという対比から、内面性の因子である運動感覚が実際の運動性と対立関係にあることを、夢の内面的な運動感覚が現実の運動によって追い払われる例を挙げて主張する（Rorschach 1998 : 75）。この主張はRorschach, H.によって運動反応の説明の最初（Rorschach 1998 : 26）から予示されており、これまでも何度も繰り返して記載した発見であろう。この対比から、運動反応と色彩反応との相互関係としての④「体験型」が提示されることになると筆者は考える。

### ④ 体験型

上述した運動反応の重要性から運動反応と色彩反応の対比およびそれらへの認知機能（F+）と情動との影響を総合して検討したのが体験型の構造的な着想であると考えられる。つまり、運動反応優位のB型は内に向かう生き方、安定した情動性と運動性の特徴で、色彩反応優位のFb型は外に向かう生き方、変動しやすい情動性、興奮して不安定な運動性の特徴である

(Rorschach 1998: 80)。B型とFb型の対比は、心的なエネルギーの内的な方向と外的な方向という対比であり、情動性の安定化と不安定化の対比であり、activityという意味での実際的な運動性が安定している状態と興奮している状態という対比になっている (Rorschach 1998: 81)。その背景には内的な運動感覚がある運動反応優位なB型において内的な運動感覚が外的な情動化や衝動化を間接化しているという考え方がありと思われる。

そうすると、知的機能の素質的要因に関連すると予想された全体反応の空間的一挙性と運動反応の同時性のうち、運動感覚の同時性は色彩反応との対比の中で検討する必要がある。また、最初に挙げた知覚と解釈の即時性と色彩反応における直接性および即時性も体験型の対比のなかで検討する必要があると思われる。

## (2) 内面性の後退と主体の外在化における同時性

ここまでRorschach, H.が知覚解釈実験の結果を分類し分析する際の方法と考え方を示し、そこにある構造の特徴を見てきた。基本構造の中心は知的な機能の認知要因と素質要因の分類であり、それへの情動要因の影響から、体験型という心的エネルギーおよび機能の内外の配分があった。それによれば内的な資質の指標である運動反応 (B) と情動性の指標となる色彩反応 (Fb) は機能的にも対比的な位置関係にあり、それら内外の感受性を間接化して秩序づける機能が中心に位置づけられて形態視機能 (F+) という構造となる。

この中心にある認知的な論理機能としての形態視機能が低下している場合で、それに加えて内的資質とされる運動反応ならびに内的な運動感覚が乏しく、それらが安定化を図っていた情動性の色彩反応が相対的に増えている場合には、感覚刺激を内面で比較検討する過程は内面性の乏しさゆえにあまり働かず、内的に留め置かれずに、即座に反応として産出されるのではないか。知覚と解釈の即座性という同時性は体験型という構造のなかでこのように位置づけることができるのではないだろうか。

同様に、運動反応や運動感覚で反映される内的な資質や内面性が乏しく色彩反応が優位な場合、外からの刺激の感覚感受が記憶心像エングラムとの内的な比較検討の連合・同化を経ずに直接、即座に反応される場合があるのではなかろうか。色彩反応における受動性ととも直接性と即座性を同時性の一種と論じた際に、この直接性と即座性は反応産出過程のどこに位置付けられるのかについて疑問を提示したが、これもまた内面性の機能不全や乏しさゆえに、感受即反応という極端ではあるが、そうした次元の直接性および即

座性という同時性が考えられるのではないだろうか。

Rorschach, H.が反射幻覚現象に着目して例示した症例のうち筆者 (川原2017: 3-4) が指摘したように、「観察8」の症例J.E.は、自分が見た人間、動物、無生物に自分自身が変容するという珍しい運動感覚の持ち主であったが、「私は世界の身体である」という世界を救済する妄想的な観念を抱いていた。彼のロールシャッハ・データでは、不良形態視優位で、体験型B:Fb=0:8であった。また反応の特徴として1つの図版に生じたイメージが安定して定まらず人間イメージが変容したり動物イメージから人間イメージに変容することがほとんどの図版で連続していた。内面性の後退ないしは機能不全は世界や外的対象という外側に自らの運動感覚を見て、主体を外在化するのではなかろうか。ここでいう反応の同時性とは内外の区分や識別が不能なために一体化してしまうような同時性あるいは直接性と言えないであろうか。

Rorschach, H.が初期の論文で取り上げた症例Eduard.F.は、筆者 (川原2017) が示したように、「自分がヨハネになりヨハネのようにキリストのそばにいて自分も救われる」と最後の晩餐の絵を書き換えていた。彼は複製をよくした画家であった。彼のロールシャッハ・データも図版に見たイメージが「いろいろ」に変容して定まらないという特徴があって、プロトコルからは運動反応が3個 (第1図版第2図版第3図版で連続しており同じような格好の姿勢反応で保続の可能性が高い) 記載されているがRorschach, H.がいう意味での一次的な運動感覚が伴ったものではないと思われる。やはり体験型B:Fb=3:5.5は色彩反応優位で色彩反応でとくに形態質が不良となる。この症例においても絵画を描く際に微細な部分に詳細な修正を加え、絵画のなかに自分や家族が入り込み救済を実現するという特有の運動感覚が表現されていた事例であるが、内面での運動感覚はロールシャッハ・データでは乏しく、むしろ変容するイメージとして運動感覚が外在化されていたのではないであろうか。主体が内面での位置を得られずに絵画や対象に外在化されるのではないだろうか。体験型という内と外の対比構造で位置付けると、運動感覚の流入という同時性が内面に位置付けられずに、色彩反応の外への反応性と外との直接性、即座性に結びついたということができようか。その意味で、主体の後退と世界との一体化や直接性がここでの同時性ということになるのではないか。

最後になるが、このようにRorschach, H.が初期に探求した反射幻覚現象における複数の感覚の同時性・反射性は、知覚解釈実験の背景に反映され、反応産出過



程の位置付けと反応構造や解釈構造のなかで、彼が「一次性」と呼ぶ本質特徴および「体験型」とする反応解釈構造として現れていた、と考える。具体的には、運動反応の知覚の同時並存性、全体反応における空間的な一挙性と感覚記憶心像の豊かさや許容性、色彩反応の即座性、体験型における直接性や一体化という形で見いだせると考える。

## 文献

- 川原稔久 (2015). H. Rorschachの“反射幻覚と象徴”について. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 第8号. 3-8.
- 川原稔久 (2016). ロールシャッハ論文集にみられる象徴解釈について. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 第9号. 3-8.
- 川原稔久 (2017). Rorschach初期論文の三症例のロールシャッハ・プロトコル. 大阪府立大学大学院人間社会学システム科学研究科心理臨床センター紀要. 第10号. 3-10.
- Rorschach, H. (1912a) Reflexhalluzinationen und Symbolik. *Zentralblatt für Psychoanalyse* 3. 121-128.
- Rorschach, H. (1965/1912b). Zum Thema: Uhr und Zeit im Leben der Neurotiker. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 158-161.
- Rorschach, H. (1965/1912c). Zur Symbolik der Schlange und der Krawatte. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 161.
- Rorschach, H. (1948/1921a). *Psychodiagnostik- Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdagnostischen Experiments (Deutenlassen Zufallsformen)*. Sechste revidierte Auflage. Huns Huber.
- Rorschach, H. (1965). *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. バッシュ, K. W. (編) 空井健三, 鈴木睦夫 (訳) (1986). ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房.
- Rorschach, H. (1965/1912d). Reflexhalluzinationen und Symbolik. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 105-152. ロールシャッハ, H. (1986/1912d). 「反射幻覚」とその類似現象について. バッシュ, K. W. (編) 空井健三, 鈴木睦夫 (訳). ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房. 45-68.
- Rorschach, H. (1965/1913a). Analytische Bemerkungen

über das Gemälde eines Schizophrenen. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 178-183. ロールシャッハ, H. (1986/1913a). 一精神分裂病患者の絵に関する分析的覚書. バッシュ, K. W. (編) 空井健三, 鈴木睦夫 (訳) (1986/1913a). ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房. 82-85.

- Rorschach, H. (1965/1913b). Über die Wahl des Freundes beim Neurotiker. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 183-188. ロールシャッハ, H. (1986/1913b). 神経症患者における友人選択について. バッシュ, K. W. (編) 空井健三, 鈴木睦夫 (訳) (1986). ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房. 86-89.
- Rorschach, H. (1965/1914). Analyse einer Schizophrenen Zeichnung. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 188-194. ロールシャッハ, H. (1986/1914). 一精神分裂病患者の素描の分析. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木睦夫 (訳) (1986). ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房. 90-97.
- Rorschach, H. (1972/1921b). *Psychodiagnostik- Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdagnostischen Experiments (Deutenlassen Zufallsformen)*. Neunte revidierte Auflage. Huns Huber. ロールシャッハ, H. (1998/1972). 鈴木睦夫訳 (1998). 新・完訳 精神診断学. 金子書房.
- ロールシャッハ, H. (1986/1912e). 失敗した昇華の一例と名称忘却の場合. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木睦夫 (訳) (1986). ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房. 69-74.
- ロールシャッハ, H. (1986/1912f). もうろう状態での馬泥棒. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木睦夫 (訳) (1986). ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房. 75-81.
- ロールシャッハ, H. (1986/1917). ある健忘症治療に役立つ連想実験, 自由連想と催眠. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木睦夫 (訳) (1986). ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房. 98-109.
- 辻 悟 (1997). ロールシャッハ検査法 形式・構造解析に基づく解釈の理論と実際. 金子書房.